

生保の人にも税金取立て

「保護以前の滞納分を払え」と強要

11月8日、市内在住のお年寄り（女性）から電話がありました。「去年から生活保護を受けているが、市役所から税金を払うように言われて困っている」とのことでした。お宅にうかがって話を聞きました。「去年までなんとか働いていたが、病気で倒れ入院、働けなくなったので生活保護を受けて暮らしています。ところが10月に市役所から、以前の滞納になっている税金（主に国保税）の督促が来て、窓口に出かけて話をしたら、毎月3000円の分割納付を約束させられました。11月に1回目を払ったら、あとが本当に苦しくなって、どうしようかと悩んでいます。」

生活保護だと知った上で、「それでも払って」

市役所の社会福祉事務所に「生活保護になったら、その間税金はストップするはずでは」と聞くと、「そのとおりです」とのこと。納税課に「なぜこんなことをするのか」と聞くと、「間違いでした」と答え、是正をすることになりました。

しかしこれは単なる「間違い」だとは思えません。私が女性から見せてもらった書類には、本人の字で「せいかつほごのため、いちどにはらえません」と理由を書いてあり、月3000円の分納を約束したことになるのです。この文は、窓口で職員に書かされたもので、職員は生活保護受給者であることを承知の上で、支払いをせまったのです。

私への同種の相談は春ごろにもあり、これが今年2件目です。前回の時にも納税課と福祉事務所に是正を申し入れましたが、また同じことをしているのです。市民の人権保障よりも、「とにかく1円でも多く税金を取れ」というマニュアルがあるのではないかと考えざるを得ません。

南部Cバス路線、利用が伸び悩み

11月1日、生活産業委員会で「Cバス」について検討しました。Cバスの西部路線は、昨年 of 年間利用者23万人、1便当りの乗客15.4人と、安定した実績をあげています。地域の市民にも評判は定着しています。

一方、走り出して3年目の南部路線は、年間利用者8万人余、1便当りでは8.3人、今年にダイヤ改善をして、9.5人に少し伸びましたが、目標には及びません。とはいっても、南部地域の高齢者や交通弱者にとっては、なくてはならないバスです。

いろいろと意見が出ましたが、集落のはずれではなく中を通る路線にしていくこと、また以前は白子～亀山をつないでいた路線が鈴鹿は三宅まで、亀山は下庄までと市境で切れてしまったのを、再び結ぶなどの工夫が必要だと感じました。

消防の広域合併、鈴鹿市には何もメリットなし、単独のままが良い

16日の市議会全員協議会で、「消防の広域化」の報告がありました。消防組織法の改正により、各県で今年度中に「消防広域化推進計画」をつくる予定となっており、各市町から県に意見をあげるとのことです。

県から「人口10万人以下の消防本部を解消する」として、いくつかの合併パターンが提示され、そのうち鈴鹿市は、亀山市と同一ブロックにする案が示されています。

消防長は、消防本部が合併しても、人数は数人しか削減にならず、現場活動人員の増員にはならない、今の鈴鹿市の消防署配置は合理的なもので、また広域協力も電話1本でできる態勢になっている、「消防団は除く」計画では、指揮命令系統がおかしくなる、などの問題点をあげ、「県の言うスケールメリットは、鈴鹿市にとってほとんどない」と断言しました。

私は「以前にも、介護保険を市単独で行なう予定だったのに、県の圧力で急に広域にされた、また市町村合併でも、四日市との大合併を上から押し付けられて、1年も市政が混乱した。今回の消防についても、市長が鈴鹿は単独で行くと、はっきり県にもの言うことが大事だ」と発言しました。これに答えて川岸市長は、「市の体制を充実させる立場を堅持する」と発言、県にもそのように意見をあげることがを明言しました。

第2名神ウォークに行きました

11月18日、亀山市の第2名神高速道路のウォーキングに、長男一家とともに参加しました。この道路は、三重県の亀山ジャンクションから滋賀県の草津ジャンクションまでの約50キロ区間で、来年4月に開通します。その前に1日だけ、一般市民が道路を歩くイベントでした。運良く抽選に当たった1500人に入りました。



第2名神・鈴鹿トンネルの前で

安坂山トンネルから鈴鹿トンネルまでの3キロを歩いて往復しましたが、全線が高架橋の上で、野登山や仙ガ岳が目の前に見えます。逆に山の方からも、自然の中を突き抜けるこの道路がよく見えます。

感想 この立派な道路の莫大な事業費には、大きな借金と国民の税金が注ぎ込まれている、ここにやがて四日市～鈴鹿を通る路線がつながることになると、鈴鹿西部の環境も大きく変わるだろう。

自転車の子どもにヘルメット義務化

15日の交通安全の会議で説明を聞いていると、道路交通法の改正で来年の6月から、小学生以下の子どもが自転車に乗るときには、必ずヘルメットを着用することになったとのこと。それも子どもが自分で自転車に乗る時だけでなく、大人が自転車の前や後ろに幼児を乗せる時にも、ヘルメットをかぶせなくてはいけないのだそうです。

毎日のように交通事故がおこっている今日、子どもを守るために必要なこととは思いますが、1才の赤ちゃんにかぶせるヘルメットはどんなのだろう、どこで売っているのだろう？あまり見たことがないので、これから赤ちゃん用のヘルメットの普及に、行政は力を入れる必要があります。

自動車に乗る時はチャイルドシート、自転車に乗る時もヘルメットと、普通に暮らすだけでも物いりなご時世になりました。

「偽装」国家ニッポン

朝日新聞記者・杉本裕明氏が追及し続けたフェロシルト問題をまとめた著書「赤い土・フェロシルト」（風媒社刊）を読むと、石原産業が大量の産業廃棄物「アイアンクレー」を、何とか産廃ではなく「土壌改良剤」というリサイクル商品に仕立てて大儲けをしようと企てた経過がよく分かる。

この「偽装」事件は、三重県行政、環境保全事業団が石原産業の応援団としての役割を演じてはじめて可能となったのである。企業を監視し環境を守るべき行政が、企業にもの言わず結果的に追認・協力していく体質が、とくに三重県には顕著であり、三重県民としては恥ずかしい限りである。

「赤福」から「フェロシルト」まで、体質は同じ

毎日のように「赤福」偽装事件の報道を聞いていて、ここも三重県行政が「偽装」の事実をつかみながら、企業にもの言えず黙認してきた体質が表面化した、同じものを感じ取る。

いまや世の中は、「偽装」のオンパレードだ。建物の耐震強度が基準に足らないのにあると言った偽装、年金保険料を取っていたのに入っていないと切り捨ててきた偽装、そしてインド洋での米英などの艦船への給油が、イラクやアフガニスタンへの攻撃に利用されていたのに、「テロとの戦い」にしが使われていないと強弁する偽装、などなどキリがない。

「偽装」の本質は、ニセモノをホンモノだとだます、ごまかすことである。「偽装」のいちばんの動機は、楽に稼ぎたいというカネ儲けの欲望である。または、儲からないところにカネを使いたくないというケチな根性である。さらに、その被害者となるであろう市民、弱者の命や健康への全くの無関心、無責任である。

つい先日も、バレる寸前で何とかムリに収めてしまった「偽装」があった。それは、小沢民主党である。民主党は「生活第一」のスローガンで参院選に勝ち、格差社会を広げてきた自民党への批判の声を集めた。しかし小沢氏のホンネは自民党と同じで、アメリカと財界に逆らうようなことは出来ない。出来ないことを「やります」と公約偽装した大矛盾が、いま民主党の中で時限爆弾のように、破綻のときを迎えつつある。